

年間第 13 主日 (マタイ 10:37-42)

正しい者を正しい者として受け入れるその日まで



中田神父が定期購読している冊子があります。「福音宣教」という冊子です。最初に購読し始めたのがいつかは思い出せませんが、購読のきっかけはお恥ずかしいものでした。ある先輩がその雑誌を手を持っていたのを見て、「持っているだけでカッコいいなあ」というものでした。中身がどういうものかも知らず、とりあえず定期購読の注文をしました。

この冊子は年間テーマを掲げて、それに合わせて発行されています。興味のない（と言ったら編集部には叱られますが）年間テーマ、年間の連載の年もありますが、解約しない理由は変わらず頁を割いてくれている「主日の福音解説」があるからです。いつも読みやすく解き明かしてくれています。そして今年の「主日の福音解説」は、ぐうぜん私たちが黙想会の指導司祭にお呼びした「山下神父様」でした。ですから今年一年間は、他の記事がどうであれ、購入した甲斐がある一年になりそうです。

その解説を参考にしながら今週の福音朗読から糧を得たいのですが、「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。」(10・27) これを聞いて、イエス様冷たい人だなあ、人間味がないじゃないかと思われる方もいるかもしれません。ただこの招きがどんな時代になされたかを考えると、一定の理解が得られるでしょう。

当時は迫害がせまっていて、「自分はイエス・キリストを信じるキリスト者だ」と公言すれば、自分が迫害を受けるだけでなく、父・母にも迫害が及ぶ可能性があったと思います。父・母がキリスト者になった場合も、息子・娘に迫害が及ぶ可能性がある。その中での招きですから、迫害に恐れをなしてキリスト者になることを捨てる人がいても「ふさわしくない」かも知れませんが、無理はありません。

司祭が司祭に迫害を受けた面白い話があります。私は 30 歳後半までタバコを吸っていましたが、当時赴任していた太田尾小教区で島内のロードレースに誘われ、タバコを吸っていてはまともな練習を積めないという結論に達し、思い切ってタバコをやめたのです。その話を、佐世保地区の司祭会議で話題にしたところ、浅子教会におられた先輩神父様（福江教会にもおられました）から、「おい、タバコやめたってな。タバコやめなくても、マラソンくらい結果は出せるやろ？」と言われました。

そう言われたのもう一つ、やめた理由を付け加えました。「先輩、タバコを吸い続けている人は、死ぬとき呼吸困難になって死ぬそうですよ。私はそんなのは嫌です。」するとさらにその先輩は言うのです。「あー根性なしが。死ぬときのことまで考えてタバコが吸えるか。」たしかにその先輩は根性がすわっていると思いますが、タバコは

嗜好品なのであって「根性」とか「信仰」とは関係ないはずです。私はあのときやめておいてよかったと今でも確信しています。

迫害があって、キリスト者になることを断念するのは確かに「わたしにふさわしくない」かもしれませんが、現代、どの家庭に生まれても信仰を本人の意志で選べて、キリスト者になったからと迫害で住まいを追われたりしない時代に、「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。」このイエスの招きは通用するのでしょうか。イエス様は、21世紀にはもはや通用しなくなるような招きをしたのでしょうか。

中田神父は人生の中で三度、死んでいたかもしれないと振り返る場面があります。その経験から、「イエスを選んで生きること」「キリスト者として生きること」は父や母を愛するのとは「重さ」が違うと考えます。愛するにも重さの違いがあり、イエスの招きは現代でも生きているとはっきり言えます。

私が死ぬかもしれないと思ったその三つとは、小学生の時川遊びをしていて割れたガラス瓶に足を突き刺したことで、失血死したかもしれないこと、司祭になって青年会でキャンプに出かけ、たくさんお酒を飲んでしまい、丘の上のキャンプ上で足を滑らせて10メートル下に転落しました。幸い、青年たちに見つけ出してもらって手当てを受けて助かりました。そして最後は、お風呂に入ってお風呂から上がったときにヒートショックに遭い、当時の賄いの方に適切な介抱をしてもらったことです。

「生かされたのだ」という体験は、すべての恩を超えたいと思います。命があるから何かの働きやお返しができるのです。命を落とすことなく今に至っているのは、周りの人を動かし、助けてくださったイエス・キリストです。三度の命拾いが、私にとっての「誰よりもイエスを愛する重さ」の源です。三度生かされたので、自分の十字架を背負うことができます。イエスのために命を失うことができます。

私が命拾いするたびに神様から遣わされたそれぞれの人は、当然命の恩人です。遣わしてくださった方ですから、預言者でもあります。

「預言者を預言者として受け入れる人は、預言者と同じ報いを受ける。正しい者を正しい者として受け入れる人は、正しい者と同じ報いを受ける。」(10・41) 私の命の恩人は、今なお生きています。ですから私には、正しい者を正しい者として受け入れるその日まで、生き続ける責任があります。

年間第14主日(マタイ 11:25-30)